期待される腐女子像からのエクソダス

――「可能性」の読み込み／誤読に関する一考察――

相　田　美　穂

（受付　2013年5月31日）

0　は　じ　め　に

本稿の目的は，やおいや，ボーイズラブ（BL）と呼ばれるジャンルの作品や，その愛好者である腐女子に対して，従来の研究で読み込まれてきた「可能性」を対象とし，読み込まれた「可能性」を，やおい・BL，腐女子に焦点を当てて再構成したときに生じる「ずれ」を明らかにすることを試みることである。

やおい・BLと呼ばれるジャンルの作品は，現在では書店やオンライン書店が採用する分類名の一つになっている。また，やおい・BLに関連した言葉に，やおい・BLの愛好者をさす「腐女子」がある。腐女子は，2000年代にインターネットを通じて使用が始まった。とりわけ，2006年には，やおい好きの女性を描いた作品(注1)が発行され，後に，実写ドラマDVD化，映画化されるヒット作となった。現在では「腐女子」をタイトルの一部に含む漫画の新作が，途切れることなく発行され続けている。

やおい・BL，腐女子を対象とする研究は，1998年ごろから現れている（中島 1998；榊原 1998）。これらは，職業としてやおい作品を書く作家が，やおいを論じたもので，野火（2003）に続く。現在の研究にみられる論点のいくつかは，これらの評論にも現れている。論点とは，中島では，女性の社会的な位置への違和感，榊原では異性愛女性というセクシュアリティへの違和感，野火では，女性と男性との間のジェンダーの非対称性である。本稿で言及するのは，腐女子を描く漫画のヒットを経た2006年以降に発表された研究のうち，立脚点の異なる4本である。理由は，これらの4本がいずれも腐女子を論じており，腐女子に読み込まれた「可能性」を示しているからである。

本稿では，やおい・BL，腐女子を相互に関連するが異なる事柄であると捉える。その理由は，それぞれ，成立時期や背景が異なるからである。やおいは，同人誌の中で70年代に生まれ，BLは，80年代の同人誌でのやおいブームを受けて，90年代に商業出版として始まった。さらに，腐女子は，2000年代にインターネット上で生まれた。また，腐女子という言葉は，やおい・BLファンに限らず，単に女性おたくを示したり，女性のうち，女性「らしさ」を放棄した女性を示すものとしても提示される。研究のうち，やおい・BL作品に焦点

を当てているものは腐女子を研究したものとはいえない。また，腐女子を考察の対象とする研究は，やおい・BL 作品に言及するものの多さに比べれば，極めて限られている。本稿でとりあげる金井淑子，前川直哉，武内佳代，吉本たいまつの論考は，腐女子を考察の対象としたものである。

次に，各論者の論考の立脚点を，論考の大意を通じて確認しておく。

金井は，ウーマン・リブの精神には存在した「身体の与件性」への問題意識が，ジェンダー概念が導入されることによって「本質主義」として顧みられなくなったことを問題化しつつ，フェミニズムの視点から「やおい」の中に「リブの精神」が受け継がれているとする論考の中で，やおいや腐女子を論じている（金井 2008）。

前川は，女性が結婚や出産を機に職を離れることを「男の絆」から女性が排除されている例として挙げ，一方で，女性が「男の絆」を鑑賞する手法によって楽しむようにもなっていることを「チーム男子」という概念を引き合いに論じている。前川によれば，ボーイズ・ラブは「男の絆」を女性が観賞する手法の一つである。ボーイズ・ラブは，前川の解釈では，少女マンガが恋愛を描いてきた歴史と，「男の絆」を観賞する楽しみが組み合わさったとき，恋愛する男性同士の姿が描かれることになったもので，ボーイズ・ラブ作品は，「男の絆」が「作り事」であることを露呈している（前川 2011）。

武内は，やおいの「秘匿性や一過性といった特徴」（武内 2007 92）を「「やおい」の決定的な脆弱性」と位置づけた上で，秘匿性の克服が重要であると論じた。武内は，吉本の議論を援用しつつ，やおいのより開かれた発信が，性別二元論から男性をも解放すると論じている（武内 2007）。

吉本は，おたく男性向けエロ作品の一ジャンルである「ショタ」を，男性がやおい・BL 作品を読むための「間口」として示し，男性がやおい・BL 作品を読む事を通じて，男性が女性の置かれている位置を理解し，ひいては，男性性から解放されると論じている（吉本 2007 a）。

本稿の構成は以下の通りである。第 1 節では，それぞれの論考が，やおい・BL，腐女子をどのような「可能性」として読み込んでいるのかを整理する。第 2 節において，それらの論考が，読み込む際に参照したものが，いかなる腐女子像であるのかを考察する。第 3 節では，各論考が読み込んだ結果を，各論考では顧みられなかった腐女子像に照らして再構成し，各論考が参照した腐女子像と，本稿で採用するそれらの像のずれを明らかにすることを試みる。

1　各論にみる読み込み

本稿がとりあげる論考は，それぞれ腐女子に対して可能性を読み込んでいる。本稿は，可能性という言葉を，潜在的に有している能力という意味で用いる。本節では，各論が腐女子に対して読み込んだ可能性を整理する。本節では，本稿がとりあげる4つの論考から，4つの観点に言及する。

1-1　ウーマン・リブの精神を保持する存在としての腐女子

腐女子に対して，金井はウーマン・リブの精神を読み込む。

> 私の一つの関心軸をなす問題ではあるが，本稿ではそれを運動思想両面から辿ることをしようというのではなく，リブから三〇年をはるかに超し，八〇年代のフェミニズムもジェンダー研究も男女共同参画も通った，現代の日本社会において，「女であるわたし」からの解放というリブ的な要求が，意外な形をとって登場していること，「やおい」や「腐女子」の中に表出しつつある性愛観・表現の中に着地しているのではないかということに言及したいのだ。（金井 2008 21）

リブ的な要求は，金井によれば二つある。一つは「女であることの主体を奪い返す」（金井 2008 20）こと，もう一つは，「女であるわたし」（金井 2008 20）の解放である。前者は，身体ではなく，女であることの意味に，後者は，女性である身体と結びついている。

腐女子に「リブ的な要求の着地点」を読み込むのは，金井が，やおいを「女性の欲望が結晶化した結果」（金井 2008 25）と捉え，女としての身体を，女であるがゆえの欲望としてのやおいの根拠であるとみなしているためである。

金井は，「リブの初発の運動の中にはあったはずの身体やセクシュアリティへのまなざし」（金井 2008 21）に関して，「やおい」として欲望を表現する腐女子が「リブ的な要求」を包含している可能性を見出す。金井がやおいに読み込むのは，女である身体に基づく欲望の表現がやおいであるという可能性である。

1-2 「男の絆」の虚構性を暴くBL

前川は，BL作品やその愛好者が男性たちから嫌悪されていることを指摘する。

> どうして世の多くの男性たちは，これ（BL作品：引用者注）に目くじらを立てるのでしょう。読者を「腐女子」といった蔑称で呼び，ボーイズ・ラブ作品を「気持ち悪い」とか「理解不能」とか言って排除しようとするのでしょう。（前川 2011 203）

前川が描写する男性たちにとって，BL の読者は「蔑称」で呼ばれる存在である。また，それらの男性たちにとって BL とは，排除すべきものである。なぜなら，それらの男性たちにとって BL は，「気持ち悪い」「理解不能」なものだからである。

腐女子や BL が前川のいう男性たちから嫌悪される理由を，前川は，２つの観点――セクシズムと「男の絆」――から説明する。

> 一つは，性を描くボーイズ・ラブ作品が，「女性の性は，男性に支配されていなければならない」というセクシズムから逸脱していることにあります。男性の目が届かないところで女性が性的な喜びを感じることへの拒否感があるのです。
>
> そしてもう一つは，自分たちが必死の思いで維持している「男の絆」という虚構が崩されてしまうことへの恐怖。――そう，恋愛や性とはまったく別ものとされている「男の絆」と，男性同士の恋愛やセックスが，実はすぐそば，地続きのところにあるという事実を，ボーイズ・ラブ作品は，図らずも暴いてしまっているのです。（前川 2011 203-204）

前川の議論では，女性が楽しむという点と，男性同士の恋愛や性を扱うという点で BL は，男性にとっての拒否感につながる。「男の絆」では，男性同士の関係性とは，「恋愛や性」であってはならないが，BL に登場する男性同士の関係は，恋愛や性そのものである。したがって，男性同士の恋愛や性を描く BL は，別ものとされている「男の絆」と「男性同士の恋愛やセックス」が，「地続き」であることを「暴いて」いる。すなわち，男性同士の恋愛やセックスとは無関係な「男の絆」が「虚構」であることを，BL は暴いている。男性たちが「必死の思いで維持している」「男の絆」が，「虚構」であることが BL によって暴かれることにより，「男の絆」は崩されてしまう。「男の絆」が，男性同士の恋愛や性と無関係であるという「虚構」を崩されることに対する恐怖から，前川のいう男性たちは腐女子や BL を嫌悪する。

つまり，前川は，腐女子に，恋愛やセックスと無関係な「男の絆」が「虚構」であることを暴く可能性を読み込んでいるのである。

1-3　性別二分法から女性を解放するやおい

武内は，吉本の議論（後述）をひきながら，「「やおい」のよりひらかれた発信は，男性読者（あるいは作者）をも性別二分法規範から解き放つ可能性を秘めている」（竹内 2007 97）と述べている。「をも」という表現には，やおいが性別二分法規範から女性はいうまでもなく男性も解き放つという意味が込められている。

男性を解き放つ BL を，武内は次のように説明する。

> たとえば今年2007年になって吉本が男性の視点から，BLなどのヤオイ作品が「男性に対し，異性愛だけが恋愛ではないことを示」し，日本社会に根強い「男らしさ」の神話から「「男性を解放するツール」として使える」と論じているように，多様な男性同性愛のジェンダー／セクシュアリティのかたちを提示する「やおい」のよりひらかれた発信は，男性読者（あるいは作者）をも性別二分法規範から解き放つ可能性を秘めている。（竹内 2007 97）

「やおい」では，「多様な」「男性同性愛」の，「ジェンダー／セクシュアリティのかたち」が提示されると武内は論じている。つまり，「やおい」の「よりひらかれた発信」とは，男性同性愛の多様なジェンダー／セクシュアリティのかたちをよりひらかれた形で，発信することである。武内が読み込んでいるやおいの「可能性」は，性別二分法規範から女性と男性を「解き放つ」ことである。

1-4　男性を解放するBL

吉本は，BLが「男らしさ」から男性を解放すると論じている。

> またBLを通じて，男性にとっても，男性の「あるべき姿」は固定化されたものでないことが見えてくる。（中略）男性は男らしい攻めであることもできるが，へたれ攻めであってもいいし，なにより愛される受になることもできるのだ。それは男性の「あるべき姿」がひとつではないことと，女性が求める「あるべき姿」も多様であることを示し，男性をバブル的ジェンダーの牢獄から解放する可能性を持っている。（吉本 2007 b 141）

吉本では，男性が囚われているものは，「バブル的ジェンダー」の「牢獄」である。なぜなら，女性が男性の「あるべき姿」として，「バブル的ジェンダー」ただ一つを求めているように見えるからである。ところが，BLでは，「へたれ攻」「愛される受」という男性像が描かれる。BLの読者は女性であることから，「へたれ」や「愛され」る男性像を，女性が好み，楽しんでいることが想定される。つまり，BL読者である女性が求める男性像は，「バブル的ジェンダー」のみならず，「へたれ」や「愛され」も含めた「多様」なものであると考えられる。

そこで，吉本は，腐女子は，「へたれ」「愛され」を特徴とする男性を，BLのキャラクターとして楽しむのみならず，男性の「あるべき姿」の一つとして受容する可能性を読み込んでいる。

2　各論にみる腐女子像の検討

前節では，やおい・BL，腐女子に関して各論が，それぞれ異なる立場から行った読み込

みの結果を整理した。本節は，各論が読み込んだ結果が，やおい・BL，腐女子のどのような側面に焦点を当てたものであるかを検討する。

2-1　リブの精神の着地点としての腐女子という可能性

腐女子に対して金井が読み込んでいるのは，「リブの精神」である。なぜなら，金井は，構築主義以降，「身体の物質的な与件性」は「無い」とされてきているとみなしているからである。

> 本稿が課題としたいのは，このポスト構造主義のバトラー的ジェンダー論ではどうしても無いとされる身体の物質的な与件性――女性の月経や男性の射精といった経験――，構築主義が死角化してきた身体をとり落とさないで，身体を論ずることができるのかである。（金井 2008 36）

本稿は，各論の問題意識に沿って読み込まれた腐女子の可能性を論じるのが目的であるから，バトラーの解釈にまでは踏み込めないが，金井が示したバトラーの解釈は誤読であることを指摘しておく(注2)。金井の問題意識は，フェミニズムとやおいを論じた以下の文章に現れている。

> やおいを「男性同士ホモセクシュアリティを扱った二次創作あるいは作品を嗜好する女性たち」といった定義で語ったとたんに，女オタクや女性版ポルノ表現扱いされ，いかがわしさのまなざしでもってフェミニズムからは切って捨てられかねない。（金井 2008 30）

金井は，フェミニズムが「いかがわし」さゆえにやおいを「切って捨て」ることもありうると考えている。ここでいう「いかがわし」さの根拠は，やおいが「オタク」であり「ポルノ」であることだ。「オタク」は「萌え」に代表されるような，虚構に欲望を感じる人々である。「ポルノ」は，性的な興奮をもたらす表現である。

金井はフェミニズムが性に関わる「いかがわし」さを「切って捨て」るとみなしている。金井にとってリブとフェミニズムは異なるものである。リブは，「女であることの主体を奪い返す」（金井 2008 20）ことと，「女であるわたし」（金井 2008 20）の解放を目標としたという。金井が「リブの精神」が腐女子に着地しているというとき，腐女子は主体としてやおいという欲望を抱いたり表現したりする。その腐女子の営みは，「女であるわたし」という主体を解放する。つまり，腐女子の欲望が女性という主体にかかっていることを金井は焦点化している。また，やおいは，アニメや漫画のパロディとして知られるおたく的な趣味とみなされている。したがって，やおいを愛好するということは，おたく的な趣味に耽溺する

ことに他ならない。やおいは，既存の作品に登場するキャラクターを対象として，元となる物語に作者の意図とは無関係に男性同士の恋愛関係を読み込み，関係性のあり方やキャラクター同士の性交を表現する。「やおい」の語源は，「やまなし・おちなし・いみなし」の頭文字をとったもので「ヤマ・落ち・意味」という物語を成立させるための３つの要素を欠いたものである。他人の著作物から引用した男性キャラクターの恋愛や性交を描いた，物語の体をなさない物語がやおいである。つまり，やおいは，女性向けポルノの側面をもつ。やおいを愛好する女性は，やおいが既存の漫画やアニメ作品を下敷きにしている以上，おたく女性である。金井は，「フェミニズム」に「やおい」は「切って捨てられかねない」というが，そもそも，やおいは，女おたく向けのポルノであり，フェミニズムを指向して描かれたり，愛好されてはいないのである。

2-2 「男の絆」の虚構性を暴く BL という可能性

前川は，腐女子を「世の多くの男性たち」から「蔑称」で呼ばれる存在として描写した。なぜなら，「世の多くの男性たち」は，BL に「目くじらをたてて」いるからである。前川が焦点を当てているのは，BL に「目くじらをたてて」いる男性たちであり，その BL を楽しむ腐女子たちである。前川の議論では，男性たちが BL に対してとる態度と，腐女子に対する評価は不可分であり，否定的という意味で一致している。腐女子が，「世の多くの男性たち」から「目くじらをたて」られたり，「蔑称」で呼ばれたりする理由は，「世の多くの男性たち」にとって，BL に描かれる男性同士の関係は受け入れがたいものだからである。

しかし，腐女子と「世の多くの男性たち」に関して，前川には誤解がある。腐女子は蔑称ではなく，自称である。ただし，蔑称として腐女子という言葉を用いる男性たちがいないわけではない。前川の説明に沿えば，それは，BL に「目くじらをたてて」いる男性たちである。それがどのような男性たちなのかは，前川は論じていない。

2-3 性別二分法規範から解き放つやおいという可能性

武内は，やおいが，性別二分法規範から「男性をも解き放つ」と論じた。その根拠は，やおいに描かれる男性像は，ジェンダーやセクシュアリティにおいて多様であることだった。多様な男性像が描かれ，発信されることは，女性はいうまでもなく，男性をも性別二分法から「解き放つ」のである。

やおいは，女性向けに男性同士の恋愛や性を描いた作品である。やおいがやおいとして成立する条件は，描かれる男性キャラクターに対して付与される受け／攻めの役割である。受けは，性交時に挿入される側，攻めは挿入する側として定義される。物語中で直接的に性交が描かれるか否かにかかわらず，受け／攻めの役割は，やおいの男性カップルには必ず付与

されるか，読み込まれるものである。やおいに登場する「多様」な男性は，受け／攻めのどちらかの役割を帯びている。いうまでもなく，受け／攻めは，異性愛における女性／男性の役割に準じており，受け／攻めの別を基盤とするやおいという表現は，性別二分法規範に則ったものである。武内の焦点は，性別二分法規範とやおいに描かれる男性の多様性だが，腐女子が依拠する受け／攻めという役割への言及はない。

2-4　男性を解放する BL という可能性

吉本は，男性のジェンダーを女性の求めに応じて規定されているものとみなす。女性の愛好がいる BL では，「愛される受」「へたれ攻」のような男性像が描かれており，女性が求める男性性は多様であることが，BL を読むことを通じて男性にも分かる。女性に男性のジェンダーが規定されていると吉本がみなす根拠は，この場合の男性が，異性愛男性だということになるだろう。後述するが，BL を読む男性のうち，ゲイ男性の一部からは，BL に描かれる男性像への批判がなされている。BL に描かれる男性像を多様な男性性の例として読み込むばかりでなく，男性ジェンダーが規定されているとみなすことができるのは，吉本が，男性を異性愛男性として想定しているからである。

吉本が例示した「愛され」「へたれ」な男性像によって，「解放」される異性愛男性とは，「バブル的ジェンダー」には当てはまらない男性だろう。むしろ，「へたれ」ているとか，「愛され」たいという状態や願望を抱いている異性愛男性が，BL に登場する「へたれ攻」や「愛される受」を女性が好むのを読み取り，BL 読者である女性が，「へたれ」ていたり「愛され」たい異性愛男性を，「へたれ」「愛され」のまま，異性愛女性として受け入れるだろうという読み込みがそこにはある。吉本は，BL に示される受け／攻め像が女性の求める男性性として成立している可能性を BL に読み込み，BL 読者である腐女子が，「へたれ」「愛され」ようとする男性を，異性愛女性として受け入れる可能性に焦点を当てているのである。

3　やおい・BL，腐女子像のズレ

ここまで，各論が腐女子に対して読み込んだ「可能性」を抽出し，腐女子や，腐女子が好むとされているやおい・BL と呼ばれる作品の特性から，各論を整理した。各論で論じられた「可能性」は，本稿で提示した腐女子や，やおい・BL の特性からみれば，妥当なものとはいえない。本節では，なぜ，各論の読み込みが，腐女子や，やおい・BL の特性からみて妥当なものとして描かれなかったのかを考察する。

3-1 「女であるわたし」と腐女子

「リブ」の精神の着地点として腐女子をとらえる議論では，やおいやBLは，女性が，女性の身体に根ざした欲望を，主体的に表現したものとして読み込まれていた。

しかし，やおいやBLを愛好する腐女子は，受け／攻めという規定の様式に基づいて男性同士に恋愛関係性を読み込んだり，創作したり，そのように創作された作品を楽しむものである。腐女子の欲望は，腐女子が構成するもので，腐女子という女性の内側に生じるものではない。既存のアニメや漫画のキャラクターを借用して描かれたやおいは，「二次創作」と呼ばれるが，「二次創作」で描かれた関係性に基づいて新たに描かれた作品は「三次創作」と呼ばれている。元々の作品から「二次創作」が構成され，「二次創作」から「三次創作」が構成される。「二次創作」を構成する元になるのは，受け／攻めという様式である。

さらに，腐女子は，既存のキャラクターや，人物ではなく，無機物に受け／攻めを読み込むこともある。受けと攻めとなるのはティーカップとソーサーでもボールペンとシャープペンシルでも，何でも構わない。受け／攻めさえあれば，それはやおいやBLとなりうるし，やおいやBLを好むのが腐女子である。このように，やおいやBLは，構成されるもので，主体的な欲望とは異なるものである。

3-2 「世の男性たち」と腐女子

腐女子をめぐる問題として，「世の多くの男性たち」との関係および，「蔑称」という二点があった。この二つの焦点に対して，前川は，さらに「問題」を提起する。

> BLを愛好する女性は「腐女子」と呼ばれることもありますが，「なぜ腐女子は男同士の恋愛に魅かれるのか」という問いを立てることもしません。なぜならそれは，「同性愛者はなぜ，同性に性的な欲望を感じるのか」という問いと同じ，誤った問いだからです。本来問われるべきは，「男同士の恋愛を描いた作品を愛読するだけで，なぜ「腐女子」などという蔑称で呼ばれなければならないのか」です。「腐女子」や「同性愛者」に問題があるのではありません。それを差別し，社会の片隅に追いやろうとする動きこそ，「問題」として究明していかなければならないのです。（前川 2011 200）

前川は再度腐女子を「蔑称」として規定し，「腐女子」が「同性愛者」と共に「差別」され，「社会の片隅に追いやろうとする動き」に晒されているものとして描いている。では，誰が腐女子を差別し，腐女子を社会の片隅に追いやろうとしているのか。それは，腐女子という言葉を「蔑称」として使用する人々であり，同時に，BLに対して「目くじらをたてる」人たち，つまり，「世の多くの男性たち」である。前川は「世の多くの男性たち」が誰なのかは明言していないが，ゲイ男性によるやおい・BLに対する批判は存在する。

石田仁は，腐女子の「ほっといてください」という自律性を問題とし，やおい・BL がゲイ男性に対する表象の横奪と仮託であるという視点から論じた論考の中で，やおい・BL に対する批判と，やおい・BL が含み込んでいる問題に言及している（石田 2007）。

まず，石田は，一部の腐女子たちが「ゲイたちがやおい／ BL に怒るのは「筋違い」であると考えている」（石田 2007 115）ことを指摘する。言い換えれば，「ゲイたち」が，やおい・BL を「怒」りの対象としていることを石田は示している。

石田はさらに，「やおい／ BL は，主にレズビアン／ゲイ・スタディーズから批判的に評価されてきた」（石田 2007 116）という。石田が挙げる「批判的」な評価は，「ゲイにファンタジーを押しつける（小倉 1994: 91），ゲイを「一角獣のような幻の存在として描いており「不愉快」である（ヴィンセント 1996: 80–2），男性同性愛者の性を商品化した差別表現である（佐藤 1996: 166）」（石田 2007 116）のように，ゲイの実態に即していないもの，差別的なものとして表されている。

やおい・BL を批判するゲイ男性たちは，BL に「目くじらを立てている」といっていいだろう。だから，やおい・BL に批判的なゲイ男性たちは，それらを愛読する女性を腐女子という「蔑称」で呼ぶのではないか。前川の議論から読み取れるのは，「腐女子」を蔑称として使用し，BL に「目くじらをたて」，腐女子を「差別」し，「社会の片隅に追いやろうと」するゲイ男性たちの存在である。

他方，腐女子は，ゲイに関心がない人々として表象されている。大学のおたくサークル活動を描いたヒット漫画『げんしけん』(注 3) では，腐女子ではない OB 女性が，現役大学生の腐女子たちに，「……お前ら実はホモ嫌いだろ」（木尾 2012）と呆れたようにつぶやく場面が描かれる。同時に，この OB 女性には，ゲイの友人がいることが示されている。このセリフは，腐女子が，男性同士の恋愛や性の表象を好む一方で，ゲイ男性に対して無関心であることを，批判的に指摘するものである。やおい・BL は男性同士の恋愛や性を描いたものであるといいながら，やおい・BL 作品では，受けが妊娠・出産する物語もあれば，性交の際に受けが攻めに挿入されるのは，腐女子が「やおい穴」と呼ぶ器官であることもある。やおい・BL に描かれるのは，ゲイ男性の「現実」にそぐわないものであるし，腐女子は，ゲイ男性に対する関心がない。なお，「世の多くの男性たち」のうち，異性愛男性は，異性愛女性としての腐女子に関心を持つかもしれないが，やおい・BL 作品には関心をもたない。自分に関係がないからである。

3-3　性別二分法規範とやおい

武内が，やおいは性別二分法規範から男性をも解放するという根拠は，やおいに描かれる男性像が多様であることだった。先に指摘した通り，やおいに描かれる男性像とは，性別二

分法規範を下敷きとした受け／攻めに他ならない。また，描かれている像が多様だから「解き放つ」という議論にも問題がある。女性や男性，また，その関係性を描いた作品も世には多く存在している。そこで描かれてきた女性像・男性像，関係性もまた，多様なものである。多様さが「解き放つ」のであれば，女性や男性は，すでに解き放たれていなければならない。多様さは，女性や男性を「解き放」ったりはしないのである。

3-4　男性の解放と BL

BL を読むことで男性が男性性から解放されるという吉本の議論は，女性の要請によって，あるべき男性性が規定されるというものだった。だから，吉本は，女性が男性に求める男性性が変われば男性のジェンダーも変わる，つまり，ジェンダーの面で男性が解放されると解釈している。さらに，腐女子は多様な男性性を描いているやおいや BL を愛好するのだから，「バブル的ジェンダー」に限らない多様な男性性を受け入れる女性である可能性があるとされていた。

ここでいう腐女子とは，やおい・BL を楽しむ女性である。読者である腐女子が楽しんでいるのは，受け／攻めの組み合わせによって構成される関係性や物語である。受け／攻めはいずれも男性キャラクターでなければならない。やおい・BL に登場するカップルに女性は介在しない。腐女子は，読者としてただ男性キャラクター同士の受け／攻めの関係性を眺め，楽しむのである。だから，やおい・BL 作品に，吉本のいう「多様な男性性」が現れているとしても，腐女子から見た場合，多様な男性性とは，物語の中で，男性キャラクター同士の関係性を構築するために必要な要素の一つにすぎない。したがって，やおい・BL 作品のキャラクターから読み取れる男性性は，読者である腐女子が男性に求める男性像とは無関係であり，腐女子は，やおい・BL で描かれる受け／攻めの関係の外側に位置している。

吉本が例示した「愛され」「へたれ」は，やおい・BL の中で受けと攻めが相互に関係性を作るために必要な性質であって，腐女子という読者からみて，それ以外に一切の有用性のないものである。

だから，腐女子が異性愛女性であることを前提としても，彼女たちが関わりをもつ異性愛男性に求める男性性と，彼女たちがやおい・BL 作品中で受け／攻めの関係性を構築するために必要とし，楽しむための男性性とは性質が異なっている。腐女子が，自分と関わりをもつからこそ異性愛男性に求める男性性と，腐女子からみて自分と関わりをもたない，腐女子がただ眺めて楽しむための関係性を成立させるために必要となるやおい・BL の受け／攻めという男性性は区別できるものだからである。

それでもなお，吉本が「愛される受け」や「へたれ攻め」に男性性の解放を見出すのは，「愛され」や「へたれ」を男性性とすることによって，異性愛男性として異性愛女性から受

容されたいという，特定の欲望を BL に読み込んでいるからである。

2006年以降，腐女子との恋愛を描いた漫画作品に登場する異性愛男性は，多くの場合，「へたれ」「受け」である。おたく男性と腐女子との恋愛を描いた『となりの801ちゃん』では，主人公のおたく男性は，801ちゃんからみて「だめエリート」である。『くさったよめがあらわれた！』(注4) では，語り手である漫画家男性は，腐女子である嫁ばかりではなく，嫁の友人の腐女子から，「受け」として取り扱われている。また，801ちゃんは，801ちゃんの方から告白し，くさったよめは，押しかけ女房として描かれている。腐女子はおたく男性を「受け」「へたれ」として愛し，受け入れるものであるという物語は，漫画の形態をとって流布されている。

つまり，吉本が BL に読み込んだのは，おたく男性の願望を満たす「物語」である。それは，「愛され」「へたれ」を生きる異性愛男性が，BL 作品を通じて想定する「愛され」「へたれ」である男性を愛し，受け入れる腐女子に対する，異性愛男性の欲望である。

なお，吉本が論じるショタという欲望は，男性のバブル的ジェンダーではないのはもちろん，男性ジェンダーからも外れている。ショタは，腐女子やおたく向けの作品において幼い男児を性の対象とする様式をさすが，対象が男児という男性であるということ以前に，幼い子どもを性の対象にする男性ジェンダーの規範はない。おたくはおたくであり，性の対象は性の対象として区分する視点が，吉本には見られない。ある種の欲望を，そもそも様々な形態のある「おたく」という言葉で説明することで，ショタという欲望は隠蔽されてしまう。吉本は，あたかも男性すべてが「バブル的ジェンダーの牢獄」に縛られているように論じているものの，ショタは，そのジェンダーには入るものではなく，男性ジェンダーにもそぐわない。

吉本が読み込んだおたく男性の願望は，異性愛女性から「愛され」「へたれ」として受容されようというものである。同時に，ショタはショタという欲望であり，男性ジェンダーではないのである。

4　むすびにかえて

本稿では，やおい・BL や腐女子への読み込みを整理し，やおい・BL，腐女子の営みに焦点をあてて，読み込まれた結果を再構成した。

まず，やおいがリブの精神の「着地点」であるという議論では，やおいが女性の身体を基盤として表現される欲望であると論じている。本稿は，腐女子の欲望は構成されるものであることを示した。

次に，BL が「男の絆」の虚構性を暴くという議論では，腐女子や BL は「世の多くの男

性たち」から排除されようとしていると論じていた。本稿では，「世の多くの男性たち」には，ゲイ男性が含まれるだろうこと，やおい・BLはゲイ男性を描いていないことを示した。

やおいのよりひらかれた発信が性別二分法規範から男性をも解き放つ可能性を秘めているという議論では，BLに描かれる男性の多様性を解き放つ可能性の根拠としていた。本稿は，受け／攻めの性別二分法規範が存在すること，および，男女を描く作品での女性／男性像の多様性があるとしても，女性も男性も解き放たれていないことを指摘した。

最後に，男性がBLを読むことで，「バブル的ジェンダーの牢獄」から男性を解放するという議論では，BLに描かれる多様な男性像を男性性として受け入れる女性としての腐女子像を読み込んでいた。本稿は，BL読者にとって，BLでの受け／攻めにみる男性性は，受け／攻めの関係を成立させるための要素に過ぎず，異性愛男性に求める男性性とは異なっていること，「ショタ」という欲望は，バブル的ジェンダーではなく，男性ジェンダーでさえもないことを指摘した。

本稿が議論の対象とした4つの論考は，それぞれやおいやBL，腐女子に可能性を読み込むものであったが，本稿は腐女子の営みややおいやBLを成立させている前提に基づいて，それぞれの論考を再構成した。各論が想定するやおい・BL，腐女子と，腐女子の営みややおい・BLを成立させている前提の間にずれがあるとすれば，各論の解釈は，「誤読」として現れることになる。本稿で示すことを試みたのは，そうしたずれそのものである。また，各論に共通して，腐女子ややおい・BLに「可能性」を読み込んでいたのだが，いずれの論考においても，「解放」や「解き放たれる」という言葉によって示されているものは明確ではない。何が，どうなることが，何にとっての「解放」であり，「解き放たれる」ことになるのかという具体的な像が，これらの議論からは見えないのである。

本稿は，腐女子の営みの一端や，やおい・BLを成立させている前提について触れたが，やおい・BL，腐女子の「文化」としての側面に踏み込むことはできなかった。さらに，本稿は，やおい・BL，腐女子に言及した論考の体系的な整理にも至っていない。それらは，今後の課題である。

注

1　小島アジコ．2006.『となりの801ちゃん』宙出版．；ぺんたぶ．2006.『腐女子彼女。』エンターブレイン．
2　「誤読」に関しては，稿を改めて論じる予定である。
3　木尾士目．2012.『げんしけん　二代目の四』講談社
4　うえやま洋介犬．2012.『くさったよめがあらわれた！　～腐女子嫁×観察日記～』竹書房

文　　献

本田透．2005.『電波男』三才ブックス.
石田仁．2007.「「ほっといてください」という表明をめぐって――やおい／ BL の自律性と表象の横暴」『ユリイカ・総特集 BL スタディーズ』39（16）: 114–123.
金井淑子．2008.「はじめに――身体の経験をめぐって」，金井淑子編著『身体とアイデンティティトラブル――ジェンダー／セックスの二元論を超えて』明石書房.
前川直哉．2011.『男の絆――明治の学生からボーイズ・ラブまで』筑摩書房.
中島梓．1998.『タナトスの子供たち――過剰適応の生態学』筑摩書房.
野火ノビタ．2003.『大人はわかってくれない――野火ノビタ批評集成』日本評論社.
榊原史保美．1998.『やおい幻論――「やおい」から見えたもの』夏目書房.
武内佳代．2007.「〈やおい〉に関するメモランダム――漫画『DEATH NOTE（デスノート）』にみるメディアミックス加速化の現在から――」.『F-GENS Journal』7: 87–97.
吉本たいまつ．2007 a.「男もすなるボーイズラブ」『ユリイカ　総特集・腐女子漫画大系』39（7）: 106–112.
―――．2007 b.「オタク喪男とボーイズラブ――801ちゃんと一緒に」『ユリイカ・総特集 BL スタディーズ』39（16）: 136–141.

Summary

An exodus from expected FUJOHSI images: a consideration on reading into/misreading of “possibilities”

Miho AIDA

This article focus on the researches which read into the “possibilities” of liberation of gender and sexuality among the YAOI and Boys’ Love (BL) works and the objective is to clarify that there is a gap between the “possibilities” read into by its readers and YAOI/BL, and the reality (or real life) of FUJOSHI.　Therefore I will show that the “possibilities” read into by the readers can be a type of misreading.